



# 与那原町史だより

与那原町教育委員会 生涯学習振興課 町史編集室

TEL 098-871-9981 FAX 098-871-9982 郵送先 〒901-1303 与那原町字与那原712番地



故 陸軍航空軍曹 平敷好盛 墓地奉仕作業

2列目左端が長嶺由康氏、3列目左から2人目が渡名喜庸憲氏 1942年（昭和17年）6月26日撮影 資料：長嶺由康氏（与那原区）

与那原町史編集室は、平成18年4月に活動休止した後、同年11月、新たな人員を配置し再開。定期的に編集委員会を開き、当面の活動内容を沖縄戦記録-『戦時記録編（仮称）』-の作成と定め、平成19年2月下旬から体験者の予備調査、4月下旬からは本調査を開始しました。

平成20年3月20日現在で42名の方からお話を伺い、これまで未調査であった与那原の兵舎、特攻艇、一般疎開、北部疎開、町内の陣地構築・壕掘り作業、作業への住民・学生の動員、沖縄戦中の南部避難、北部の食糧難などについて、重要な証言・資料を得ることができました。

『与那原町史だより』は、これら調査結果の一部を掲載し、町民の皆様へご報告するとともに、さらなる情報提供を呼びかけることを目的に発行するものです。

年1回の発行、限られたページ数ではありますが、関心を持って読んでいただくと幸いです。

また、証言・資料についてご協力をいただいた皆様、各区の区長・老人会長・民生委員の皆様へ、紙面をお借りして感謝申し上げます。

町史編集室では、平成20年度も沖縄戦当時のさまざまな体験を聞き取り、「戦争の悲惨さを、戦争を知らない世代に語り継ぐための資料づくり」に取り組んでまいります。皆様のご理解・ご協力をよろしく願いたします。

## 与那原町史編集委員会

(順不同)

### 委員長

吉浜 忍（沖縄国際大学教授、南城市）

### 副委員長

眞榮平 實（与那原町立縄曳資料館長、森下区）

### 委員

新垣庸一郎（元高校教諭、新島区）

山内 敏春（元小学校教頭、江口区）

渡名喜興憲（元高校教諭、与那原区）

### 事務局（町史編集室）

辺士名 彬、諸見里 一、友寄 隆志

恩河 直美、富川 恵子、吉田 充泰

聞き取り調査  
人々の証言①

# 旧制中学生の沖縄戦体験

## 江口公民館での座談会

ちょうせい  
■ 辺土名朝盛さん

昭和2年生。江口区在住。昭和20年3月当時は、10区（港区の一部）に住み、私立開南中学3年生。

ひろし  
■ 金城 廣さん

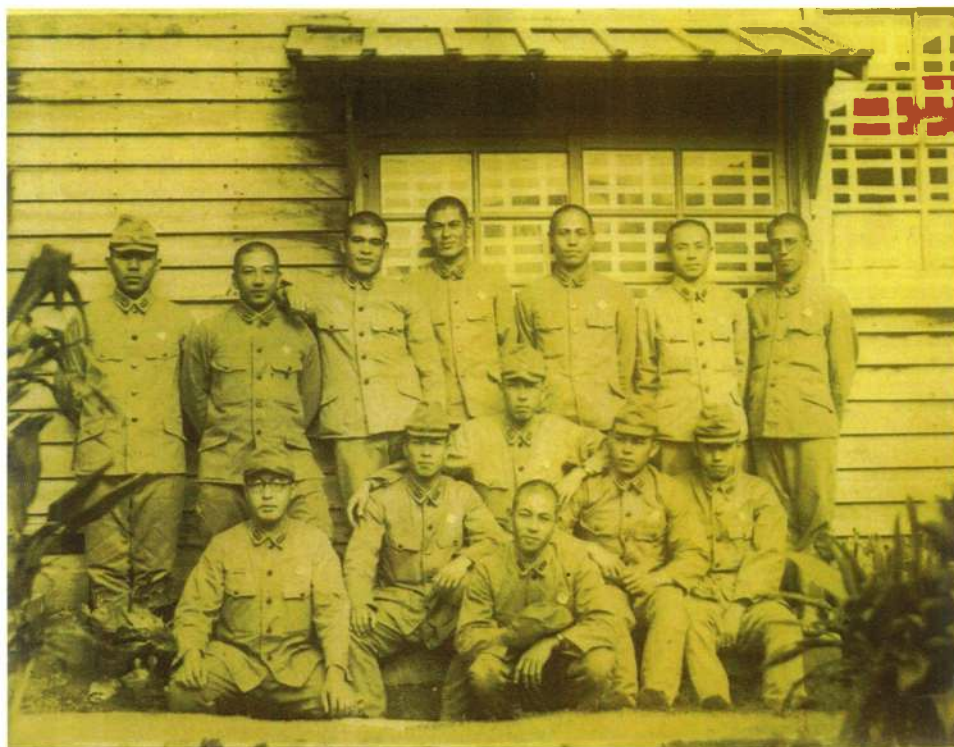
昭和4年生。江口区在住。当時は7区（江口の一部）に住み、県立第一中学3年生。

ゆういちろう  
■ 福治友一郎さん

昭和6年生。浜田区在住。当時は3区（森下区）に住み、県立第一中学1年生。

としみつ  
■ 山内 俊光さん

昭和7年3月生。江口区在住。当時は9区（江口区の一部）に住み、県立第一中学1年生。



中城湾臨時要塞司令部の若い兵士たち（現在の与小敷地）

1941年（昭和16年） 中城湾臨時要塞の建設。現在の与那原小学校敷地にその司令部と病院が置かれ、浜田区に兵舎が建設された。

1944年（昭和19年） 南西諸島防衛の第32軍が配置されると、要塞司令部は改編される。同年、学生らを動員し新兵舎建設（江口区）と港湾埋立（港区）が行われた。

1944年（昭和19年）撮影  
資料：外間政太郎氏（那覇市）

### ◆ 与那原の「兵舎」「軍隊」「徴用」 ◆

山内：僕らの記憶では、江口と浜田に兵舎があつて、今の与那原小学校の敷地に軍の病院があつた。

辺土名：僕の三男兄貴が、浜田兵舎の陸軍上等兵としていた。

福治：僕は、浜田兵舎に入ったことがあります。壕掘りの帰りに、兵舎に行つて乾パン（※小型で堅く焼いたビスケット状のパン。日本軍の携帯食糧。乾麩ともいう）や金平糖

をもらった。

山内：江口兵舎を作ったのは、僕や福治さんが旧制中学に入學した昭和十九年であり、その作業に駆り出されている。それから港湾の埋立作業にも動員された。

福治：トロッコで（今の東浜橋付近へ）土を運ばされた。

金城：今の江口団地や江口公民館の近くから。

福治：作業の時は、昼飯は江口兵舎の中でもらつた。

金城：うちはね、江口の兵舎づくりでは、モッコを担いでいた。浜田兵舎へは、軍事教練をするといつて一週間かな、泊まつたことがある。昭和十七年の終わり頃だと思ふ。

当時の小学校（現在の青少年広場付近にあつた）は、新校舎が完成して第一大里国民学校から分かれたばかりだったけど、いくさが来たために兵隊に徴用された。卒業式だけは与那原の校舎でやったよ。与那原国民学校の第一期生はうちらだったからね。

辺土名：僕の場合は、垣花の高射砲隊や泊の高射砲隊の陣地づくりに参加し、また、読谷の飛行場づくりのため一週間泊まり込みで参加した。

金城：ここでは主に与那原学生会が壕掘りなどに駆り出されたが、十

十空襲（昭和十九年十月十日）の後は、動員体制があまりとれなくなりました。

**辺土名**：今のクララ幼稚園の丘辺りで、中城湾向けに砲座を据え付ける作業があった。その壕掘りに参加し、戦後、役場建設時に、壕の跡を見つけた。

**福治**：食糧の乾パンなどを置いておく壕をつくっていた。

**山内**：当時は名称を学徒勤労作業とあって、昭和十九年は、授業が四月から六月ぐらいで、後はずっと作業だった。

また、戦後見たのだが、（江口にあった）ナゲラ川に横穴が掘られ、舟艇が隠されていた。おそらく特攻艇でしょう。

それから、先輩方から聞いた話であるが、昭和天皇が皇太子時代に沖繩にいらしておられる。沖繩出身の漢那憲和が艦長の戦艦「香取」に乗り、与那原の海岸に上陸し、街を通り、駅（現在の農協の位置にあった）から鉄道で那覇へ向かった。当時は、みんな頭を深々と下げて顔も見られなかったという。

## ◆ 朝鮮人軍夫 ◆

**福治**：朝鮮人の男が一〇〇名くらいいたよ。どこかの壕掘りか何かから

夕方帰ってきて、（森下にあった）与那原劇場の床に寝かされた。

**金城**：ある日、朝鮮人二人が間違つて料亭の玄関に入ってしまった。向こうから憲兵が二人来て、「朝鮮人が来るところじゃない」と言つて竹刀で殴つた。たまたまオジが通りかかつて、見かねたんでしようね。憲兵に向かつて「エーヒャー、やめろ。こいつらも天皇陛下のために働きに

来てるんでしよう。いじめるんじゃない」と。口論になって憲兵は帰つたけど、散々だったね、あの朝鮮人は。

**辺土名**：警察署は、今の新島になるかな。当時は近くに照屋医院があつて、消防団もあつた。大きなクムイ（池）もね。

**山内**：火の見矢倉もあつたね。

## ◆ 十・十空襲 ◆

**辺土名**：十・十空襲の時、僕は汽車に乗つて那覇に通学途中だった。古波蔵付近で駅長が真っ青になつて「空襲、空襲」といつて汽車を止めに来たので、乗客は全員驚いて、すぐに小高い木の影に逃げ隠れた。僕は小高い丘の簡素な防空壕に隠れ、そこから小祿の飛行場や那覇港などが攻撃されるのを見た。

飛行機が来ない合間に、大里駅ま

で歩いて戻ってきた。途中で南風原の与那覇が燃えているのを目撃した。

「行機だぞ」と。空襲だとわかり、学校にも近づけない。しばらくそこで待機して、与那原に引き返した。

**福治**：僕も繁多川陣地構築に行く途中で空襲を知った。与那覇が燃えるのも見た。

十・十空襲の時は、江口にも爆弾が落ちていた。

**山内**：その日は作業があつて首里に向かつていた。首里の石嶺で部隊の壕掘りを命じられていた。今の南風原の新川から首里に通ずる道の途中で、飛行機が飛んでいるのを見た。演習だと思つていたら、「アメリカ軍の飛

あとになって聞いた。

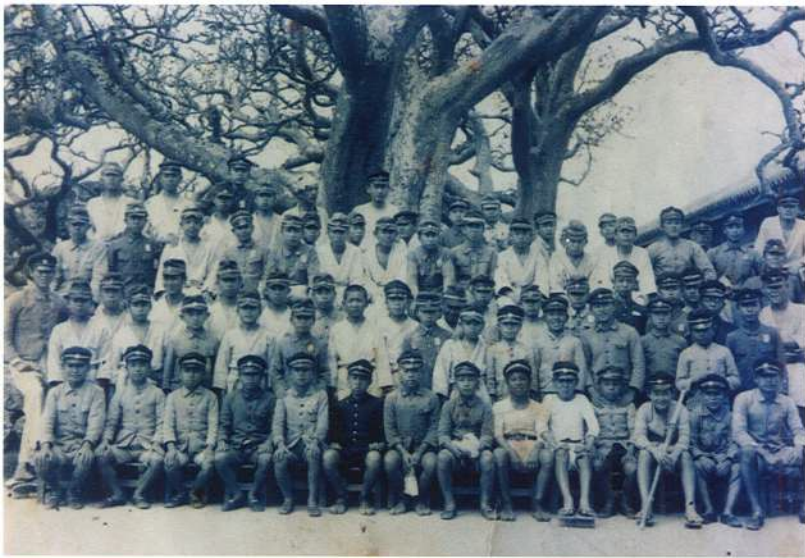
## 山内俊光さんの体験

**山内**：昭和十九年に婦女子は疎開しなさいと、県外疎開があり、ひどくなつてからは県内疎開。うちの家族は親戚のいる大里の当間に行った。

最初アメリカは具志頭の港川から上陸すると思つていた。それが中部に上陸し南部にきた。私は、最後は糸満の真栄平で捕虜になっている。

陸軍の司令部も向こうへ行つていくから、南に行きなさいと言われた。途中の道は死体がいっぱいでした。

私自身は、弾の破片で額に傷を負つた。



与那原学生会（親川にて）

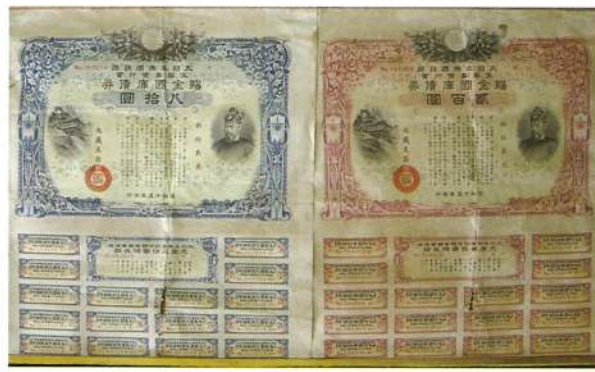
1943年（昭和18年）頃撮影 資料：金城廣氏（江口区）



### 紀元二千六百年記念保険証券

徴兵保険の証書。男児の幼いうちに加入すると、子どもの徴兵等の時に保険金が給付される。

1940年（昭和15年）発行  
資料：山内敏春氏（江口区）



### 支那事変行賞 賜金国庫債券

日中戦争の論功行賞として、功労者に支給する一時賜金の代わりとして交付された。

1940年（昭和15年）発行  
資料：新垣良英氏（新島区）

「九死に一生を得た」というのかな。  
しかし、戦争で姉を亡くしている。  
どこで亡くなったのか、遺骨もあり  
ません。姉は首里高女四年生で、看

護隊として従軍した。一緒に首里へ  
通学し、そこで別れたのが最後でした。  
軍国教育、それが沖繩戦の被害を大  
きくしたと思う。

### 金城廣さんの体験

**金城**：鉄血勤皇隊に入るとき、  
私は下痢をして、家族の避難  
する大里村平良で一時静養す  
ることを認められた。そこ  
は与那原の顔見知りは何名も  
いた。

**山内**：金城さんは、下痢のお  
陰で命拾いした。そうでなけ  
れば、爆弾を抱いて敵戦車に  
向かって行ったかも知れん。

**金城**：昼は壕などに隠れてい  
た。うちらは玉城・知念に行  
くつもりが、具志頭の後原の  
空き家に行つてね。向こうで  
日露戦争に行ったおじいさん  
が、「与那原から来たのなら、  
途中はどうだったかね」と。死  
体がゴロゴロしていました」と  
と返事したら、「日露戦争  
でも、そういうのは見たこと  
がない。このいくさはあやし  
いぞ」と言っておられた。  
その晩、艦砲射撃か何かの、  
ドスンという音がして、地

面に五、六メートルの穴があいた。  
ここにはおれないと、我々はその夜、  
東風平、糸満を隠れながら歩き、具  
志頭の破名城に向かう手前の草むら  
に隠れていたら、向こうからアメリ  
カの戦車が来た。五メートルほどし  
か離れていない。摩文仁へ弾をジャ  
ンジャン撃っている。だから家族に  
死んだふりをしなさいと言った。戦  
車を通った後にブルドーザーが土地  
を均したと思つたら、今度はGMC（米  
軍トラック）がたくさん摩文仁に向  
かって行く。草むらの中で一晚過ご  
したら、日本兵が三名入ってきた。  
北海道の人だったが、「あんたは手を  
ケガしているし、地元の人だから、  
アメリカもどうもしないはずだから」  
と、日の丸を割いて包帯代わりにし  
てくれた。翌日、米兵が来て銃で威  
嚇し、立ちなさいと指示した。その  
日本兵は持っていた手榴弾を投げた  
けど、信管を抜くのを忘れて爆発し  
なかった。それで助かった。

投降した時、日の丸の包帯をみた四、  
五名のアメリカ人がワーツと集まって、  
ある人は捨てようと、ある人は取る  
うとした。あの光景は忘れないね。

その後、尋問を受け、診療所に行  
つて腐った手の肉を全部取ってもら  
った。

軍国教育を受け、友達が死んでも、

次は自分が続くからと涙も出なかった。  
戦後も生き延びて申し訳ないと思つた。  
南部では阿鼻叫喚というのか、むご  
い死体を見て、負傷者の助けを求め  
る声も聞いた。戦争をしない教育が、  
いかに大切かということだ。

### 辺土名朝盛さんの体験

**辺土名**：昭和二十年、僕は暗号隊員  
としての訓練を受け、「山部隊」に配  
属され軍務に従事したが、訓練最後  
の日に、教官から「敵は渡具知の海  
岸より上陸せり」との電文を伝えられ、  
「最後に親に会つてきなさい」と言わ  
れて家へ帰った。その晩から艦砲射  
撃が激しく部隊に戻れなくなり、や  
むなく家族と共に行動することにな  
った。教官が帰してくれなければ、  
僕も生きていかなかったかも知れない。

与那原から大里の南風原に避難し  
たのは、昭和二十年四月か五月上旬。  
民家の一室を借りて家族一緒に暮ら  
した。与那原が燃えたのを大里城跡  
から目撃したのは四月頃ではなかつ  
たか。その後は、玉城、具志頭、糸  
満へ行った。

糸満の糸洲のヤギ小屋の近くでの  
ことだが、僕の頭に石のようなもの  
が当たって気を失った。しばらくし  
て下を見ると、隣りにいた人の頭が

落ちていた。僕の髪にはその血糊が、一か月くらいべつとりついていたが、水のない所に抑留されていたため、洗うこともできず、そのままの状態だった。

最後は喜屋武岬へ。米軍が一〇〇メートルぐらい先から火炎放射器を使って近づいて来る。行き場がなく喜屋武岬辺りを行き来した。日本の陸戦隊と思われる三名の軍人がいて、僕らの家族が「手榴弾を下さい」と言ったら、「君らは民間人だから逃げなさい」と言われた。名城の浜まで逃げたら、偶然にもそこで兵隊の三男兄貴と再会して、どうせ死ぬのならみんな一緒だと、家族全員手を挙げ投降しようと歩きだしたら、周りにも大勢の人が手を挙げていた。

いろいろと取り調べを受け、三男兄貴は兵隊だから別にされ、僕と長男兄貴はそこに一か月くらい抑留され、作業をさせられた。その後、野嵩で家族と一緒にあった。

### 福治友一郎さんの体験

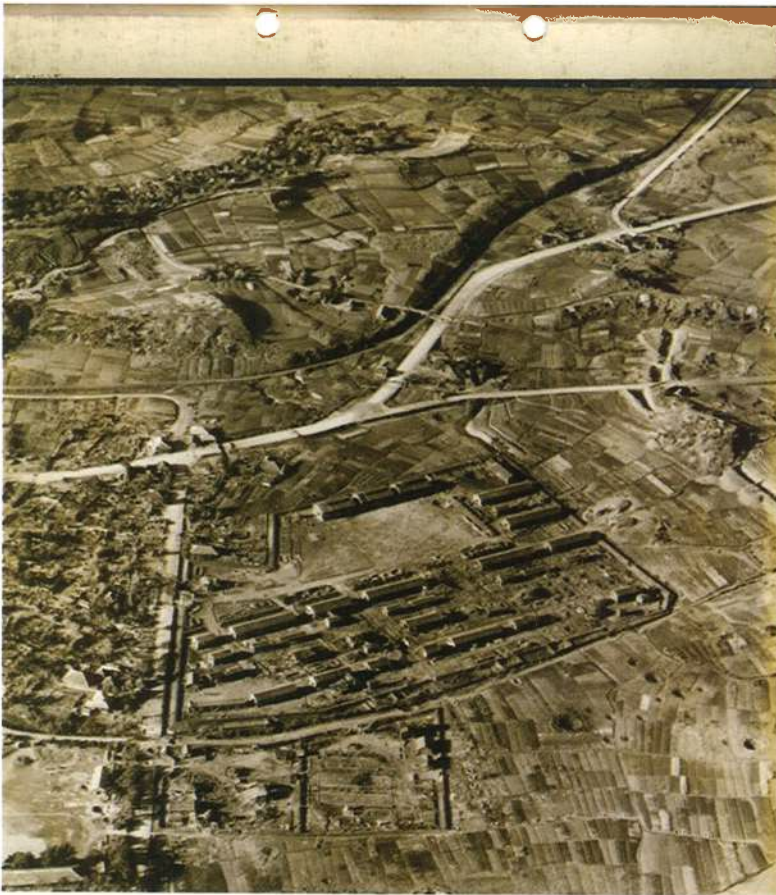
福治：僕ら一年生は、鉄血勤皇隊には動員されていない。家族と行動すると言われた。最初は大里の古堅にいたが、南部から攻めて来るという情報が入ったものだから、母の実

家に近い西原の棚原に隠れていた。今度は中部から攻撃されるといので、西原から与原を通り南に向った。中城湾には、敵の軍艦が何十隻も並んでいた。

今の上の森公園あたりで日本兵につかまり、「戦場（中部）から来ているから、君らはスパイだ」と疑われるから、知人である浜田兵舎の中隊長と少尉の名前を挙げ、ようやく納得させた。

それから、当時の大里村役場の後ろの壕に避難した。大城にある山の壕に入っていて、五月二十七日の海軍記念日になれば、日本軍が来るから大丈夫と聞かされたのを覚えてる。

僕は南部の地理に詳しくなく、お婆さんから波平、潮平といった地名を聞いた。島尻では迫撃砲や榴散弾が多かった。糸満の米須では壕に入れない。今の平和祈念堂付近に隠れていたら二〇メートルほど先に米兵が立っている。米兵を見てみんなビクビクして手を挙げ



CV-10 374-1 0730(-9) 1 APRIL 1945 - CONF.

BARRACKS AT YONAHARA TOWN, OKINAWA. THE PHOTO SHOWS THE RESULTS OF AN ATTACK BY OUR BOMBERS AND TORPEDOES ON 31 MARCH. APPROXIMATELY ONE THIRD OF THE BUILDINGS HAVE BEEN DESTROYED AND OTHERS DAMAGED. A GROUP OF THREE BARRACKS IN THE CENTER FOREGROUND, HIT BY TWO SMALL BOMBS, BURNED TO THEIR FOUNDATIONS.

### 米軍本島上陸日の与那原（空撮）

アメリカ空母ヨークタウンの艦載機が低空撮影した与那原。中央に浜田兵舎が見える。

1945年（昭和20年）4月1日撮影  
資料：藤本文昭氏（愛媛県）

たら、おじさんが持っていた懐中時計を取り上げられ、歩くよう指示された。具志頭の港川辺りからGMCのトラックで玉城の百名へ連れて行かれた。

百名へ行く前に、コップ一杯の水が飲めたら自分たちは殺されてもいいと、母が少し英語を知っていたので、「ギブ ミー ウォーター」と言ったら、米兵は水缶にいっぱい水を入れて持って来た。

戦後与那原に戻って来るまでの間、何度も収容所を移動させられた。主な移動地は、辺土名さんが泡瀬、野嵩、南風原の宮城、与那原。金城さんと山内さんが百名、仲伊保、ヤンバルの大浦・二見、大里の大城、与那原。福治さんが百名、知念、与那原であった。

### 捕虜、収容所へ帰村